を以て「シンデレラ」の如きものは少し後の時代まで話さないで殘して置く方が好い。意地惡い憎むべき傾向の存在として摸寫されたる繼母や繼父の傳統的觀念に對して反對する人には同意するものである。この關係はお噺の含んで居る眞理に對しては本質的のものでは無い。どんな年寄でも之には同意する事と思ふ。保姆がよく判斷し、氣轉をきかし、同情を持つ事はお噺を適應させる事にあるのである。

リズムのある詩を讀む事

幼稚園に於けるお噺の使用に因んで、時々子供等にリズムに富んだ詩を讀んで聞かせる事の價値に就て云ふ事は餘計な事ではあるまい。この種類の詩は澤山は聞かせないで且つ度々繰り返してやる事が必要である。詩のリズムは、子供がリズム的の音を好むのに一致し且つこんな詩を讀んで聞かせる事は子供に本の中にはこんな面白い事があるのだといふ暗示にもなるのである。ユウゼン、フイールドの"The Rock-a-by Lady"の如き詩は子供魅するものである。

又ルーシー・ラーカムの有名な The Rrown Thrush"の如き簡單な詩を聞かせてやると、其の詩のリズム、內容の兩方共が子供の心に感動を與へる所の手ごたへを認める事が出來る。Mr, ClementC. Moore の a Visit From St. Nicholas も亦子供を喜ばせる詩の一である。

小話

おちば

○

マーガレットとスヰートピーが睦子さんのお見舞に行きました。丁度其時睦子さんはリンゴの様に赤い頰をしてスヤ〳〵と眠てお出でゝしたから二人を伴れて來た美いちや

んは睦子さんの母様にマガレツトとスヰートピーを渡して。
『ではお大事に。おばさまさようなら』
と云てそうと戸をしめて歸てしまひました。後にのこつたマガレツトとスヰートピーも出來る丈だまつて靜かにしてゐました。
お母様は時々氷の一杯は入た袋を睦子さんのお額にのせたり枕に代へたりなさいました。
やがて夜になつてあかりがつきました。
睦子さんが目をさました時よく見えるようにと云て母様が二人の花をあかりの側の處へお置きになりました。其内夜中になつたので待ちくたびれて二つのお花がお話をはじめました。
スヰトピー『睦子さんはお寢坊ですね。いつおきるんでせう』
マガレツト『ほんとうにさうね。それはさうと睦子さんが目がさめたら何て云ひませう?』
スヰートピー『あら、さつき來る道で美いちやんから云ひつかつた事を云ひませうよ』
マーガレツト『さう、さう、ぢやあなたが初に云ふのよ』
スヰートピー『あらあなたが先に云ふのよ』
と云てゐる中に花のお話が耳には入たと見えて睦子さんは目をさましました。
仲よしの様にお顔をならべてゐる二つのお花を見て睦子さんは少し嬉しさうなお顔をしました。
スヰートピー『さあ云ふのよマガレツトさん』
マガレツト『あら、あなたが先に云ふのよ』
とまた二人でこんな事を云てゐる間に睦子さんはいつか又眠てしまひました。
二つの花はおや〳〵と困た顔をしました。
けれど其内ぢきに夜があけたので今度は睦子さんも先の様に長くは眠りませんでした。
『母様今朝は頭が痛くない事よ』
と朝になつた時睦子さんは嬉しさうに云ひました。お母様は睦子さんの額をさはつたりお熱を計たりして氷の袋をはづしておしまひになりました。それからお顔を拭いたりお藥をのませたり種んな御用をなさつてからあつちのお室の

方に行ておしまひになりました。

マガレツトとスヰトトピーは『ぢや今度は一處に云ひませうね』とお約束がきまつたので一二三で

二つの花『睦子さん御病氣いかゞですか。美ちやんがよろしく』と云ひました。

其聲が小さい〳〵可愛い聲でしたので睦子さんは大變よろこびました。そして

睦子『ありがたう。あなた達の聲はずゐぶん小さいけど可愛いゝこと。もつとお話をして頂戴な』

と云ひました。マガレツトもスヰートピーも可愛いゝ聲をたてて笑ひました。そんなにお氣に入たら二人で歌をうたつてあげませう。そして香ひの子供に踊つてもらひませう、と云てスヰートピーがつゝんでゐた花瓣を開いたら南京玉を風船にしたような小さい圓い身體の子供達が五人ほど飛び出しておもしろいダンスをしました。二つの花は可愛いゝ聲で

フワ〳〵〳〵と香ひの子
かるい身體を上や下
さあ踊りましよう。たひひましよ。
踊のうた夢のうた
花のお國の夢のうた。

とうたひました。其內隣のお室に足音がしましたら香ひの子達は急いで花の中には入てしまひました。お母樣はからかみをあけて睦子さんに溫い牛乳を持て來て下さいました。それから睦子さんの御病氣はだん〳〵よくなりました。そして睦子さんがお床の上に起きられる樣になるまで毎日靜かな時になるとマガレツトとスヰートピーは可愛い聲でうたをうたつて香の子を踊らせては睦子さんをよろこばせました。（をはり）

○

ある雨の降つた日に、三郎さんはお母樣と混み合た電車に乘りました。窓のガラスが曇つてゐたので三郎さんは、お手々で大きな目を二つ、三角のお鼻と圓いお口を拵らへて顏を畫きました。出來た〳〵、小さい手をたゝいて喜んでゐると母樣が『さあ三郎ちやんおりるんですよ母さんに

おつかまりなさい」とお仰いました。三郎ちやんは、しかたなしに窓のお顏をぢつと見て上手に敬禮をして降りて行きました。

其中電車は、いくつも〳〵停留場をすぎて終點に來ました、そして人がみんな下りてしまふと、わきの方の車庫の中へゴーッとは入つて行きました。

やがて車掌も運轉手も下りてしまひました。すると三郎さんが顏を畫いて置いた窓が、しやべり出しました。

『イヤー、廣いなあ車庫の中は、あんなに溢杯電車がならんでゐる、うれしいなア、さつきの坊ちやんは僕にこんな大きな眼玉を畫いてくれたから僕は何でも見る事が出來るイヤアどうも愉快々々』

すると之を聞た隣のガラス窓が、

『羨しいなア君は、立派な眼の玉を畫いてもらつて何でも見えるなんて、僕にも誰か早く顏を畫いてくれるといゝナ君々、そんなによく見えるなら少し僕に話して聞かせ給へ。大變靜かになつたが一體、君こゝは何處だね』

『此處は君、車庫だから今は誰も乘ては來ないのだが、たくさんな電車が此處では皆からつぽで休んでゐる。あつちの方には赤い字で書いた故障車もゐる、すゐぶん廣いよ車庫の中は。ね君、さつき三郎君が僕に眼を畫いてくれた時にね僕面白いものを見たよ、それはね、大きくなく風呂敷包を背負た小僧さんがコクリコクリ居ねむりして寢てしまつたのさ、そして隣の人に依りかゝりはじめると、隣のおばあさんが困てね、オイ〳〵小僧さん、しつかりしないと乘りこすよつて起していたつけ』

と話をしてゐるうちに靴の音がして車掌と運轉手がは入て來ました。

發車々々といふ聲がすると、いつか車はグーツと動きはじめました。『オヤまた出かけるようだ、こんだ又三郎さんが乘て僕にも顏を畫いてくれるといいな』と隣の窓ガラスは思ひました。其の內どや〳〵と人の足音がしました。

『君、どんな人が乘て來たの』隣のガラスが聞くと、

『おや今度のは腰のまがつたお婆さんだ『どつこいしよつ』て腰をかけた、向側にはひげの生えた小父さんが新聞を讀むところだ、それから、袴をはいたお姉さんが二人、きつ

と學校に行くに違ひない、其の次はおや〳〵、お母樣におんぶした小さい坊ちやんだ、三郎さんに似てゐるけど少し小さい、あつ、僕達の處へ來た〳〵』

『うれしいな、今度は僕が畫いてもらはう』

と隣の窓ガラスが喜んでゐますと、其の坊ちやんはお口もきけない位まだ小さいので顏を畫くどころではありません。三郎さんが畫いておいた窓の顏をぢつと見てゐましたが、何かいやな物でも見た樣子で、やがて小さい手を振り上げて「め、め、め」と言ひながら、顏の處をめちやくちやに捺りはじめました。

『困たなあ、困たなあ』とガラスは小さい聲で言ひました。

『君、どうしたのさ、どうしたのさ』と隣の窓が聞きました。

『どうしたのつて、此の小さい坊ちやんは僕の顏をめちやくちやにするんだもの、もう目がつぶされたから、どつこも見えやしない、つまらないなア』

と言てゐるとまた さいお手ゝで少し殘てゐる、お口の處まで、めちや〳〵に消してしまひましたので、お窓は、とう〳〵お話する事も出來なくなりました。(終)

○

三吉は毎日〳〵工場へ通て、小父さんや兄さん達と一處にトンカチ〳〵とお仕事をして働いてゐまして。

或日お晝の御飯がすんでお休みの時に、三吉は工場の裏へまわつて上の方をながめて居りました。其邊は工場が澤山あるので黑いのやあかいのや背の高い煙突がニヨキ〳〵といくつも立ち並んでゐました、丁度其の中の一つの煙突は惡い處があつて煙を出してゐませんでした。

『やあ高いな〳〵。煙突掃除をする小父さんはいいなア、時々あんな高い處へ登て行くんだもの。オヤオヤ此處に階子がついてゐる僕もひとつ登てみよう、』

とスル〳〵と上て行きました。三吉はもう十歲になつてゐるし木登りは上手だし、見てゐるうちに一番上の處へ行てしまひました。すると直ぐそばにねずみ色をした雲が來ました。『やアこれは丁度いゝ、一寸僕をのせておくれ』三吉は身輕く雲にとび乘りました。すると後から〳〵もく

〳〵と綿の様な雪が湧いて來ます。『面白いなア、雪のようだけど冷たくもないし』と言ひながら其上をどん〳〵踏んで歩いて行きました。と向の方を見ますと、まあ雲の上の廣いことひろいこと、あつちこつちに白いのや紫や薄紅や眞黑やいろ〳〵の雲のおふとんがならんでゐます、そして其の中に雷さまも眠てゐるし雨の小父さんも夢を見てゐるし風の神さまはゐねむりをしてゐました。

『やあ、おもしろいなア、でも折角みんな眠てゐるんだからおこさないようにしてそうつと、一寸雨の小父さんの如露をかしてもらはふ』と持てみるとなかなか重いのを三吉は力いつぱいで持ち上げ下の方へ向けて水をまきました、下の方では大變、急に雨が降て來たので皆かけ出すやら傘をさすやら大さわぎです、それをみてゐた三吉なほ〳〵面白くなつて、あつちへまいたりこつちへまいたりしきりに雨を降らせてゐましたがもう手が痛くてたまらなくなりましたので如露をそうと片づけて、今度は雷樣の電氣仕掛けの太鼓をかついで來てならしました。これは重くもなし手も痛くないので喜んでゴロ〳〵とまた方々ならして廻りました。誰か目を覺ますかと思て止さうとしましたが雲の中ではみんなよく眠てゐます、で三吉は安心して又あちこちとかけまはりました。其中あんまり歩いたので足が痛くなりましたから太鼓もそつと元の所へかたづけておきました。とみるとさつきまで居眠りをしてゐた風の神さまが高いびきで其の後の大きくふくらんだ袋が何だかさはつて見たい樣に思ひましたので、靜かに持て來て、さうつと口を解いてみました。

ヒユー〳〵〳〵〳〵急に風が出ましたので、下ではまた大さわぎ、帽子が飛ぶやら干物がおちるやら、塵埃が起つやらしました。たくさんの人が、あんまり皆困るらしいので、「これはいけない」と思て袋の口をしめようとしましたが、どうした事かちつとも閉りません、急いで閉めようとすればするほど風はだん〳〵強くなるし、どうしたらいゝかと三吉も困りきつてしまひました。けれど悧口な三吉は何か思ひついたらしく袋の口を其ままにして置いて一生懸命かけ出しました、そして雲よりはずつと離れた處に居るお日樣のとこへかけ付けました。

『お日様〳〵、風の神様が眠てゐる間僕が一寸袋をかりて風を出してみたら口が閉まらなくなつてしまひました、どうしたらいゝでせう、お願ひですからをしへて下さい』と言ひました。

　お日様はニコ〳〵しながら『オヤ〳〵、三吉、おいたをしたね。あの袋は風の神様の外はだあれも閉める事は出來ないんだよ、眠てゐる處を氣の毒だけど風の神様を起して閉めておいたゞきなさい、よく靜かに起してわけを話してたのむんですよ、風の神様が寢ぼけると恐いんだからね』とおつしやいました。三吉は『わかりましたお日様ありがたうございます』とおじぎをして急いで風の神のそばへ歸て來ました。そして靜かに呼びました。

『小父さん〳〵、すみませんが一寸起きて下さいな。小父さんの眠てゐる間一寸袋をかりて口を開けてみたらどうしても閉める事が出來なくなつてしまひました。お願ひだから小父さん閉めて下さい』と言ひました。風の神は大きなのびとあくびをして

『やれ〳〵いたづら小僧だな、まよし〳〵今閉めて來よう』と直ぐに承知をしましたので三吉も大安心を致しました。

　かうして下では雨が降るやら、大風が吹くやら大さわぎをしてゐる間に上の方では大勢のお星様やお月様はいゝ氣持ちさうに眠てゐます。三吉は此の雲の上のふしぎに靜かな景色を驚いて見てゐますと、いつの間にかお日様がだん〳〵遠くなつて行きます。

『お日様、お日様、あなたはどこへ行くのですか』と追ひかけて行きますと、お日様は

『もうぢ夜が來るからわしは外の遠い國へ行くのだ』とおつしやいました。

『おや〳〵、お日様は夜が來ても眠らないのですか、そんな遠くへ行て、それで又明日の朝は歸てくるのですか』と驚いて三吉が聞きますとお日様は、

『さうさ、わしは一年中眠たことはない、かうして方々歩いてゐるのだ、人間のやうに立ち止てゐるなんていふ事はないのだ』と言てゐる間にもお日様はずん〳〵遠くへ行きます、すると雲の上も今までの様に明くなく、何だか淋しくなつて來たので三吉は急にお家の事を思ひ出しました。

歸らちと思てみるとあんまり方々かけまわつたので上つて來た煙突がどこだかわからなくなづてしまひました。
泣きさうになるのをやつと堪へて三吉はさつきの風の神の處まで來ました。そして
『小父さん、僕お家へ歸る道がわからなくなつたんですが後生ですからをしへて下さい』とたのみました。風の神は
『やあ、いたづら小僧、とう〳〵弱つたな、よしよし小父さんが歸らしてやらう。雲の中で一番低く行かれるものは雨雲だ、そらあのねづみ色をしてゐるんだ、今小父さんがあれを呼んであげるから、お家まで送ておもらひ』と言てピーと口笛を吹きますと向の方からねづみ色の雲がかたまつて來ました。
三吉は大喜びで『小父さん、どうも有難う、さようなら』と言て元氣よく雨雲に乘り、自分のお家の屋根まで送てもらつて歸りました。（をはり）

泰西名家幼稚園觀

記者譯

——Charles W. Ellot.

幼稚園の基礎的觀念は、卽ち學校の總ての階段に於て必要なものと同じものである。
幼稚園に於ける最上の方針及實際は、子供が何か爲る事に依て物を學ぶ事と、彼等が學びつゝあると同時に樂しんで居るといふ事である。そしてそれが爲彼等は興味を持ち同時によりよく學ぶ事が出來るのは幸福である。
舊い見界では、學校に於ては、子供に嫌はれ、苦痛とせられ、望ましくないと思はれる過程でなければ、其以外には眞の、或は價値ある敎訓は無いとせられてゐる。敎育に於ける此の恐ろしい過誤に對して幼稚園は充分滿足ある成巧を來し